

「アーカイブ」は研究所の記録活動。研究員のササキが主に担当。研究室をどうつなぐのか、どう可視化できるのか、を考えつつつける。

ア

ーカイブ ササキユイチ

### 研究所自体のつくられかたに対する関心

バスリサーチをしていた頃から、「つくりかた研究所」自体がどういうふうにつくられていくのか、活動がどうやって動いていくのかをウォッチするというか、記録していくことに関心がありました。ある部族のなかに入る文化人類学者のような感じで、いわゆる「アートプロジェクト」の現場で、道具立てとか言葉遣いも含めて、どういうアクターが動いているのかを記録したいという思いです。なので、バス企画の頓挫があり「研究室」という言葉が出てくるあたりの、その変わり目には、かなりテンションが上がったというか、もちろんそこにはネガティブな動揺みたいなものもあったし、どこか「ここがふんばりどころだよな」といったムードもありました。

誰がなにをしているのかわからない、裏でもぞもぞ動いたり、集まっているような、うごめきというか、その状態が面白いと思っただんです。わからないなかでも、誰かと会うこ

とで盛り上がったりする。テレビのことで盛り上がった(テレビ研究室)、とりあえず集まる場をいろんな仕方で設定しようとしている佐藤(成)がいたり、「基礎体力上げとく?」という感じで僕と朝比奈が勉強会を企画したりしている。そのときは、集まり自体が試されていたような気がしています。その状態は、すぐく可能性や面白みが感じられました。そういった、もそもぞした動きのなかから「研究室」というものが出てきて、その後は、そこに収まっていたように思います。

オートポイエーシスという生命システム論の概念があって、そのモデルとして、例えばこんな話があります。家をつくるとき、だいたいはある設計図を元に大工たちが集まってきて家が建てられるわけですが、オートポイエーシスにおいては、そういったトータルプランはなくて、ただ大工たちだけがいる。で、個々の大工たちの働きだけでもって、家らしきものができていく。もちろん、これ自体ひとつの比喩ではあるのですが、少なくとも触発はされるでしょう。そういう新しい組織の動き方や集まり方みたいなものは考える必要があるだろうと思いました。

その頃、長島とベテラン枠の須藤が、「研究室がどんどんできているけど、絶対どんどん潰れていって、研究室の廃墟みたいになっていくだろう。すごく面白い」というような話をしているのを聞いて、なんとというか、むかつ腹が立ったことがありました。上から視線というか、先を読まれている。先の例でいえば、設計図・トータルプランみたいな見通しを、握られている。そういうときに、じゃあ「廃墟」になる前に、研究室というものをもうちょっと面白がれないか、ということを考え始めました。

### 研究室をマッサージする

研究室ができてきて、なんとなく「この研究室に所属してます」みたいな感覚がそここに生まれていきました。それぞれできた研究室、という「部屋」に、分けられてなのか、自ら望んでなのか、入っていくような感じでした。けれども、研究室ってそういうものだけではないんじゃないか。もっと別な人たち、例えばタグみたいなものとしても考えられるんじゃないか。

僕自身は、つくりかたの思想史、テレビ、エスノドラマ、うごきかた、さばきかたなど、いろいろな研究室に参加したり、見学に行ったりしていました。横断する動きを示しているのとはどうかと考えることです。もう少し研究室を横断して話せる場があったほうがいいんじゃないか。同じ悩みをなんとなく抱えていたり、他の研究室にとっても知っておいたほうが良いこと、一緒に考えたほうがよさそうなこともあるかもしれない。いま置かれている状況自体も、俯瞰して見える場があってもいいんじゃないか。それぞれが活動的な

かで知った面白いことや、見つけた方法を、もうちょっと共有できる場や仕組みがあったほうがいいんじゃないか。そういう考えでした。別な言い方をすると、研究室という言葉が強く効きすぎているんじゃないかということです。研究室という概念は、もつとこねるというか、マッサージされるべきだと思います。いろんな研究室が活動していくなかで、それぞれは動いていたり動いていなかったりしましたが、組織がどう動いていくのか、決まっていなかったときのももぞとしたうごめきは、二年目以降は見られなくなっていました。同時に、本格的に、誰も研究所の「全体」がわからないという状況になっていきました。

### 「全て」を把握させる、アーカイブズという表現

アーカイブズはコンテナーをデザインすることだという考え方があります（アーカイブズ＝複数のアーカイブを保存管理するシステムや施設）。分別されていないごみのような、雑にして多量なものを収容する容器を設計するのがアーカイブズの作業であると。研究員が研究室に収まってきたころに、研究室がアーカイブにおけるコンテナーみたいなものになったらいんじゃないかと考えました。ちょうどその時期（研究所二年目）に、東京アートポイント計画が実験事業として開発したデジタルアーカイブのシステムを、研究所

でも使ってみるようになりました。それは「リソーススペース」と「ワードプレス」という、どちらもオープンソースのソフトウェアを用いて、事業で発生する記録資料の一元管理と公開を行うというものでした。そのシステムを借りながら、研究所をそのままアーカイブしようと考えました。研究室それぞれの動きに対して活動や成果を横断的に入れられる容器をつくれば、出来事が終わったあとでも、アーカイブを見ると活動の全体がわかるようになるということです。

アーカイブズのインターフェイスは、三年間の活動期間が一つの画面で一望できるというプランです。一コマが一日と紐付けられていて、三六五日×三コマ（三年分）がずらりと並んでいる。そのコマのなかに、その日になされた活動とかが格納されている。グーグルマップのように、クロスアップしたりズームアウトすることもできる。

このかたちには二つの理由があります。一つは、そうすると絶対に空白のコマがたくさな出てくるはず。例えば、ある研究室の三六五×三コマのタイムラインが横並びになっていて、色がついて埋まっているところと、空白なところがある。そのリズムみたいなものが見えてくる。「土日に活動してたんだな」とか、「コンスタントに平日もいろいろ入っているな」とか、「口ばっかりだな」とか（僕のことですけど）。その、三年間というそれぞれの生活、つまりライフのリズムと、その活動のリズムがどういう重なり方をして

いたのが見えるといいだろうと思いましたが。これは研究所の活動をおのれの生活のなんと位置づけるのかという問題に通じています、金銭面含め――。

もう一つは、そのような仕方では仮設的にであれ、研究所の「全体」を望める視座を用意するという事です。ちなみに、タイムラインは研究室だけでなく、任意のキーワードでソートすることもできる。そういうプランでした。

ドキュメントのように、ある種の暴力がないとつくられないものがあるのは確かです。でも、それでは拾い切れないものがある。もちろんなにをしても「全部」や「全体」みたいなものは幻想なわけですが、けれどやはりアーカイブズでの表現は、ドキュメントとは別なものになるはずですよ。

このドキュメントを読まれる方は、つくりにかた研究所は研究室の集まりだと思われるかもしれませんが。でも、それは固まっているわけではなく、あっちゃこっちゃ行ったりなかで、このようになってきたわけで、研究所だから最初から研究室があった、というわけではありません。つまり、つくられたものには見えていない「裏」がある、ということです。「裏」といっても楽屋ネタではなくて、研究所の場合はそこが本体だったはずなので、なおさらそこが重要だ、という感じがしています。

編集注…本稿は、編集・東によるインタビューに基づいて作成されました。